
もう何も怖くない

海堂莉子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう何も怖くない

【Nコード】

N6353Z

【作者名】

海堂莉子

【あらすじ】

地味で真面目がモットーの有馬那津子と少々だらしなさが目立つ中村小太郎。そんな二人の恋物語。

第1話

鏡に映る姿を念入りにチェックする。

染められることのない髪は肩よりも若干短く、前髪は目にかからない程度に、制服の乱れは一切なく、スカートの丈は膝まで。

最後に黒縁の眼鏡を装着して、完璧な真面目人間が出来上がった。出来上がりに満足した私は、家族の待つダイニングへと足を向けた。

「おはようございます」

「おはよう」

朝の挨拶はしっかりと相手の目を見て。

父も新聞から目を外して私を出迎えてくれる。

「今日も完璧だな」

「そうですか？　ありがとうございます」

嬉しそうに微笑む私を複雑な表情で父は見た。父とてこんなに真面目くさった姿で真面目くさった挨拶をされるのは寂しいのだろう。家族なのだからもっとフランクに、もっと楽しく過ごしたいと思っているのだろう。その気持ちは分かっているつもりだ。でも、今の私にはこうすることしかできないのだ。

真面目に、地味に。

それが今の私の合言葉なのだから。

私の通う学校は、最寄りの駅から3駅、駅を降りて徒歩でおよそ10分といったところにある。

電車は必ず女性専用車両に乗る。朝の女性専用車両には、女性特有の化粧品や香水の臭いが充満しており、息が詰まるほどではあるが、一般車両に乗るよりはましだろう。

電車に乗り込むと必ず決まった席に着き、カバンの中から読みさ

しの文庫本を取り出す。本を読んでいれば3駅などあつという間の時間だ。

駅の改札を潜ると、同じ学校の生徒たちが歩道からはみ出して通行車両の邪魔になっているのを気付かぬふりで歩いているのが目に入る。

注意したいが、注意をすれば決して時間内に学校に入ることではできないだろう。それほど多くの人が交通マナーを守っていないということなのだ。

私は歩道をきちんと歩き、前を見据えて歩く。
顔なじみの近所の老人に会うと、挨拶を交わす。

女生徒が大きな声で笑っているのが目につく、私は少し眉を潜めるものの、何も見えなかったかのように再び前を見据える。

校門を潜り、昇降口に入る。教室に入ると目の合ったクラスメイトに挨拶をする。相手が聞いてなくても構わなかった。

自分の席に着く前に、通りすがった男子生徒の腕を掴んだ。

「ネクタイが曲がっています。直しますので、まっすぐ姿勢よく立ってください」

驚きながらもぴしりと姿勢を伸ばした。ネクタイを真っ直ぐに整えると、にっこりとほほ笑む。

「はい、出来上がりました。とても素敵になりましたよ」

軽く一礼すると自分の席へと再び足を向ける。

「あつ、少し髪が乱れていますね。こちらを向いてください。直します」

結い上げられていた髪に若干の乱れがある女生徒を見つけて、有無を言わずこちらを向いて座らせた。

「なっちゃん。今日は大人っぽい感じにして。今日は彼とデートなの」

女生徒は私にリクエストをつける。

「解りました」

素早く結い上げられていた髪を解くと、手際よく再び結い上げて

いく。

終わると大げさすぎる賛辞を受け取り、漸く席に着く。

これが真面目人間、有馬那津子ありまなづこの朝の風景である。

「ババアっ。なんでもっと早く起こしてくれなかったんだよっ」

「バカだねっ。起こしたに決まってるだろう。起きないあんたが悪
いんだ。あんたの飯はもうないよ。健太郎が食っちゃったからねっ」

「ざけんなよっ。俺は朝食わないと授業に身が入らないんだよ」

ボサボサの頭を掻き回しながら、不平不満をぶつける。

「あんたが授業なんて聞いたことがあんのかい。聞いてたらもっ
いい成績を貰ってるだろうがっ。腹が減ってるんであれば、コンビ
ニにでも行くんだね。私はもう出るんだから、あんたの相手してい
る暇はないんだよ」

身ぎれいに整えられた母親はもうすでにカバンを肩にかけていた。
寝起きの苛立ちを壁を蹴ることで発散させ、急いで部屋へと踵を
返す。

鏡なんて見ていられない。髪がぼさぼさなのを直す暇もない。顔
を洗うことも、歯を磨くこともせず、制服を身に着けると、何も入
っていないカバンを持って家を出た。

家から学校まではチャリだ。かつ飛ばせば5分で着くだろう。普
通の人だったら15分〜20分はかかる距離だ。

籠の中にカバンを放り込むと、髪が乱れるのもお構いなしに全速
力でチャリをこぐ。コンビニに寄る時間は悔しいが残されていない。
仕方ない。クラスメイトから弁当を掠め取るしかなさそうだ。

校門の前には、風紀委員の生徒と先生が立っていた。先生は校門
を今まさに閉めようとしているところだった。

その隙間をチャリですり抜けた後、大きな声を挙げた。

「先生、おはようございます」

「こらっ、中村。もっと余裕を持って来いといつも言っているだろうがっ」

「いいじゃん。遅刻はしてないんだからさっ」

先生がさらに何かを喚いていたが駐輪場までチャリを走らせた俺には聞こえない。校門はクリアしたが、まだチャイムまでに教室に入らなければならないという使命が俺にはあるのだ。先生の小言には付き合っていられない。

籠の中のカバンをむんずと掴むと俺は一目散に走りだした。鍵はこの際かけない。こんなオンボロチャリを盗む奴はいないだろう。盗まれたら、いい加減新しいチャリを買ってくれるだろう。そんな期待を若干含みつつ。

俺が昇降口に入った頃には、生徒の姿は一人も見当たらない。みなもう教室に入っているのだ。チャイムが今か今かと迫っている。不運なことに俺の教室は四階。三段飛ばしで階段を駆け上がるとさすがに息が乱れるが、毎日同じことをしていれば自然と体力もつく。

結局俺は、チャイムと同時に教室に滑り込んだのだ。

「中村っ。お前はまたぎりぎりかっ。まったく。とにかく早く席につけ。よーし、ホームルームを始めるぞ」

俺はぜえぜえと肩で息をしながらどかりと席に着いた。

これが少々だらしなさが否めない、中村小太郎^{なかむらこたろう}の朝の風景だ。

第2話

刺さるような視線を感じて、隣を窺った。

隣の席に座る有馬が食い入るように俺を見つめていた。いや、もはや見つめているのではない。観察されているというのが正しいところか。

恐ろしいほどに美しく伸ばされた背筋、寝癖なんて一つもない美しい黒髪、地味を絵に書いたような黒縁眼鏡。本人は完璧に自分は地味だと思い込んでいるのだろう。確かに彼女は一見すれば絵に描いたように地味だ。だが、残念なことにそう思っているクラスメイトは少ない。

真面目な彼女は、乱れた服装や髪型が我慢出来ないようで、登校すると目についたものを片っ端から直してゆく。

間近で見る彼女からは、地味なオーラはまるでない。整えられたあと、

「はい、素敵です」

と微笑まれる。地味の鎧をかぶっていても、全身から隠し切れないう美しさを醸し出している。その笑顔を見てしまったクラスメイトは、男女関係なく一瞬にして惹かれてしまうのだ。

彼女に直して貰いたくて、わざと寝癖を直さずに来る奴までいる始末だ。

そんなクラスメイトたちに彼女はまるで気付いていない。

このクラスの中で一番彼女にお世話になったのは、間違いなく俺だろう。

同じクラスになったその日から半年以上がたった今でも彼女は俺の身嗜みを直してくれている。

クラスで一番だらしない、なんて自慢にもならないが、それが事実なのだ。

別に彼女に直して貰いたくてわざとそうしているわけではない。

朝が本当に苦手な俺は、どうしても起きられず、ぎりぎりの時間になってしまうのだ。

そして今日も、ショートホームルームが終わると同時に彼女に捕まった。

「中村君、直ちに立ってください」

有馬のオーラに気圧されたように立ち上がった俺の全身を、一通り下から上、上から下と眺めると、うーん、と小さく唸り声をあげた。

「相変わらず、だらしなさが素晴らしいです。やりがいがあります」
「貶されているのだろうが、なんとなく嬉しく思ってしまう自分はどうかしているんだと思う。」

「すみません」

踏みつぶした上靴を片足を上げながら直していく。汚い上靴も汚い足も——一応足は洗っているから綺麗だが——全く気にならないのか、躊躇することなく俺の足を掴む。

「今度、家からブラシを持ってこようと思います」

「は？」

「中村君、あなたいつ上靴を洗いましたか？」

「いや、一度も洗ってない」

「そうだと思います。ですので、金曜日の放課後に学校で一緒に洗いましょう。そうすれば、上靴は綺麗になりますし、家に上靴を忘れることもないでしょう」

妙案とでも言いたげな彼女の微笑みを見下ろし、頬が赤くなっていくのがわかる。

今の言葉から察するに、彼女は俺の上靴をともに洗ってくれと言っているのだ。一度も洗っていない、もう手遅れなのではないかと思うほどに真っ黒なこの上靴を。

「いや、悪いからいいよ」

「いいえ、必ず洗います。このままでは、上靴が可哀想です」

問答無用というように、下から睨みつける彼女は、少しも怖くな

い。むしろ可愛いと思ってしまったことは、彼女には内緒だ。

「分かったよ」

隣の席の中村君のだらしのなさは天下一品だ。

彼の登校時のだらしなさといったら、公園などで生活をするホームレスと同レベルと言ってもいいのではないか。場合によっては、ホームレスのほうが身だしなみはしっかりしている。

私の朝の毎日は、彼の身だしなみを整えることから始まると言っても過言ではない。

恐らく彼は、相当朝が苦手なのだろう。とりあえず制服だけを身に着けて、学校へ現れたのだ。

上靴のかかとは履きつぶされ、ベルトはだらしなく垂れて、ズボンはずりずりと腰どころかパンツが半分以上出るほどにずり落ちている。ブレザーの前ボタンは全開、そこから覗く白いブラウスは皺くちゃで、ボタンは掛け違えている。ネクタイは首からぶら下げているだけだ。

目じりには目やにがついたまま、恐らく歯磨きをする時間もなかっただろうと推察する。頭はもはや爆発コントの後のありさまだ。アフロじゃないのにアフロになっている。

上靴をきちんと履かせた後、ブラウスのかけ違いを直した。そのとき、若干自分が男の人の衣服を脱がせているような気がして恥ずかしくなった。ちらりと上方を覗けば、中村君も恥ずかしげに頬を染めているのを見ると、同じ思いを感じていたようだ。

「あのさ、有馬。俺、それくらい自分で出来るからさ。そこまでやってもらわなくても……」

「そうですか？ では、ご自分でやってください」

ここは大人しくその申し出を受け入れる。が、きちんと事を成すか始終監視することは譲れない。

中村君は、ネクタイを締めるのが苦手なようだ。見かねて私が出す。どうやら相当苦手なようで、あっさりと私に委ねた。そのホッとした顔を見ると、くすりと笑いが漏れるのだ。

「では、中村君。流しで顔を洗って、歯も磨いてください。その頭も豪快に水をつけてしまったほうがいいかと思います」

「ん」

中村君は、私がいかにしつこくしても決して怒ったり、鬱陶しがったりすることはない。

きちんと身だしなみを整えていれば、中村君の姿はとても優雅なのだ。一般的に見て整った顔も、一般よりも多少高い身長も、物腰の柔らかい笑顔も、女の子には人気がある。登校したときの中村君を見て、驚く女の子も多いが、そんなだらしないところもなんだか可愛い、と思っている女の子はあまりに多い。

私の立場を羨ましいと思っている女の子は多くいる。変わってほしいと願う出る子がたまにいるのだが、そういう子が中村君に近づく、彼は困った顔で断るのだ。

「ごめん。やって貰っても、きっと最後は有馬にやって貰うことになるからさ」

確かにミーハーな女の子の身だしなみチェックは甘く、あとでこっそり私が直すのが常だ。

「ごめんな」

そう言ってほほ笑む彼を見て、女の子たちは撃沈しても嬉しそうに帰っていく。それがたとえアフロでも。彼の笑顔の威力は凄まじいことを物語っているようだ。

「なあ、有馬。いつも、ありがとな」

水の滴ったまま向けられた笑顔に私は思わず惹きつけられた。

第2話（後書き）

読んでいただいております。ありがとうございます。

この作品は、第17話で完結する予定で、もうすでに書きあげてあります。その間に中途半端になっている「無邪気な恋心」を書き進めていき、こちらが完結次第そちらも更新を再開するという形にしたいと思います。

最後までお付き合いいただければ嬉しいです。

第3話（前書き）

あけましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いいたします。

2012年1月

第3話

金曜日の放課後を心なし楽しみにしていたのは、私だけの秘密だ。朝から始まる中村君とのあれこれを楽しみにしている私は、恐らく彼が好きなのだろうと思う。

誰かを好きになると、その人のために綺麗になりたいと思う。私だってその気持ちは、その辺の女の子と一緒にだ。違うのは、たとえば私がそう思ったとしても頑として地味を貫くということだろうか。少しばかり思い浮べる。流行りのファッションと流行りのメイクをした自分を。だが、すぐに打ち消す。

それは、私には許されていないことなのだと。ふと甦りかけた記憶を強制的に押し込めた。

「さあ、中村君。上靴を洗いましょう」
私がかから持参したブラシと靴磨き材等を見て、中村君は諦めたように頷いた。

「分かった」
流しは教室を出るとすぐにある。

「中村君、これを履いてください」
私がスリッパを差し出すと、一瞬だけ目を見開いて、そのあと呆れたように笑った。

「用意周到だな」
困ったように笑う中村君をしばし見惚れた。

眉が下がり、いつもよりも優しいイメージを感じさせた。

「当然です。上靴を脱いでしまったら、足は冷えてしまいますし、靴下が汚れてしまいますから」

「なあ、有馬のそれ、癖なのか？」

「それ？」

「敬語。誰にでも敬語だろ？」

「ああ、そうですね。癖のようなものです。気になりますか？」

あの日からだ。

私が敬語を貫き通すようになったのは……。

『私が真面目だったら……、私がもともとと地味だったら……』

過去の私の声が頭をかすめ、慌てて振り払うように振った。

今でも鮮明に覚えている。だが、それを引き出すのは危険なことだ。

「どうした？ 具合悪いのか？ 俺のために無理しないで帰ったほうがいいんじゃないのか？」

心配そうに覗き込む中村君の顔は、きっと私よりも蒼白だろうと思う。

「大丈夫です。ちょっと考え事をしてしまっただけですから」

中村君の真っ黒な上靴を水にぬらしておもむろにブラシで擦り始めた。

私が大丈夫だと納得したのか、私に倣って中村君も手を動かし始めた。

「俺。上靴なんて洗うの高校入ってから初めてかもしれないな」

「えっ。私たちもう2年生ですよ？」

「上靴なんて1年間一度も洗わなくても、履いていられるだろう？ 進級と一緒に上靴も新調するから上靴を洗う必要性を感じなかったんだよ」

思い起こしてみれば、中村君とこうやって改めて話すのはこれが初めてかもしれない。

「それは、不衛生ですね」

「まあな。でも、男ならこれくらい平気だけだな」

けらけらと悪びれずに笑う中村君の横顔をちらりと窺った。

袖をまくって現れた逞しい腕に、うっすらと青い筋が浮かび上がって見える。私とは違う筋肉質な腕に触れてみたいと思ってしまっ

た。

「ど、どうした？」

思っただけでは留まらず、濡れた手で思わず触れてしまった中村君の腕。私の手が冷たかったのか、びくりと震えた。

「ごめんなさい」

真っ赤になってしまったであろう顔が上げられなくて、一心不乱に上靴を磨いた。

「ごめんなさい」

消え入りそうな声でぼそぼそと呟くと、有馬は俯き、上靴磨きに没頭してしまった。

濡れた手で触れられた腕が、奇妙に熱を帯びていた。

地味で真面目な（を装っているように思える）彼女が、俺はいつの間にか好きになっていた。毎朝繰り広げられる一連の行為は、俺にとってはいつしか特別なものになっていた。

彼女にしてみれば、ただの善意でやってくれていることにすぎないことは十二分に分かっているつもりでいるが、知ってしまった気持ちちはもう後戻りできそうになかった。

もっと彼女を知りたい。

「なあ、有馬は家でもそんな感じなのか？」

「そんなとは？」

「うーん、例えば敬語で話したり、きっちりとした服装に、きっちりとした生活態度。それから、そのメガネ。家でもかけてるのか？それって伊達だろ？」

「どうして解ったんですか？　これが伊達だつてことに」

「そんな驚くことじゃないだろ。こうやって隣りに立ったり、後ろに立ったりすると、そのレンズ越しの風景が見えるんだ。レンズに度が入っていると、ぼやけて見えるけど有馬のレンズは肉眼で見るの

と変わらない」

別に伊達メガネを付けていたって構わないと思うんだ。おしゃれとしてメガネをかける人だっているわけだから。ただ、有馬の場合はその理由がおしゃれではないのだろう。

「視力は本当はいいんです」

「別にいいよ。おしゃれでかけてるわけじゃないことは分かるけど、その理由を無理やり聞こうなんて思っただけからさ。ただ、家でもそうなのかと思ってさ」

「家でもかけてます。家での私も学校での私も変わりはありません」家でも学校でも素の自分が全く変わらない人間は、あまりいいのではないか。みな、少なからず違って、家のほうがやっぱりリラックスしているという人のほうが多いはずだ。

有馬の場合、本当に彼女が言うとおりに家と学校の区別がないのなら、相当自分を殺しているのではないかと思えた。彼女が学校で素を出しているとは思えないからだ。

彼女が素の自分を出す場所があるんだろうか。

「なあ、有馬。本当のお前ってどんななんだ？」

彼女がヒュッと息を呑むのがわかった。

上靴を磨く手は二人とも止まり、互いを見つめあっていた。

放課後の廊下には、もう人は通っていない。みな、いそいそと出て行ってしまった。階下で騒ぐ声がわずかに聞こえるばかりで、この階に人が残っている気配はない。

彼女が緊張しているのが分かった。

「ごめん。変なこと言ったな。気にしないでくれ」

彼女の視線から逃れて再び上靴に手を伸ばした。

本当は、もっと問い詰めたかった。彼女が何を抱えているのか。何を悩んでいるのか。何に救いを求めているのか。知りたかった。俺が彼女の安らぎになれたらと思った。

だが、彼女が詰めていた息を吐いたのを聞いてしまったら、それ以上問い詰めることなど出来そうになかった。

俺はなんて役立たずなんだろう。

第4話

俺の上靴は、驚くほどに綺麗になった。と思っているのは俺だけではあるが。

半年間も積み重ねられた汚れはちよつとやそつとでは落ちない。俺的には、綺麗になったレベルではあったが、有馬は不服そうに顔を顰めていた。

「ありがとな。これだけ落ちれば十分だ」

途中、飽きた俺が放り出そうとした片方を有馬が結局磨いてくれたのだ。その時には、有馬が磨いていた方は十分に美しかった。

正直、靴磨きを甘く見ていた。腕は疲れるし、腰は痛くなる。いくらやってもなかなか落ちてくれない。

終わった時には、解放されたことに心底ホッとしていた。

「もう暗いから送ってくよ。有馬は電車通だったよな？」

「一人で大丈夫です」

「危ないから送らせてよ。俺、心配で気になって夜寝れなくなっちゃうからさ」

有馬が頷くのを見て、ホッとした。

まだ少し離れがたかったのだ。こんな気持ちでいるのは、俺だけだとは承知しているが、後少しだけ。

有馬は地味に見せかけているが決して地味ではない。内面の話だ。コミュニケーションに物怖じするタイプではない。心底真面目ではあるが、極度な人間不信であるわけでもなさそうだ。

限りなく真面目で地味な生活を自分に課しているように感じた。それを苦に感じないほどに長いことそれは続けられたのだと、俺は睨んでいた。

本当の彼女を暴きだしたいと思った。だが、それが彼女の望んでいることとは限らないのだ。

「有馬は部活とか入ってないよな？」

「はい。私には門限があるので、部活には出れないんです」
門限。

高校生の娘を持つ家ならば当たり前存在するものなのだろうか。身近に門限を気にする女がいないので、その言葉が異様に新鮮に感じた。

「門限なんてあるのか？」

「はい。親が異様な心配性で。高校生なんだからもう少し融通してくれればいいんですけど……」

「門限、何時なんだ？」

「6時です」

俺は腕時計に目を落とした。もうすでに5時半を過ぎてしまっている。

「なんだよ、門限までに間に合わないんじゃないの？ 親、厳しいのか？ 大丈夫なのか？」

「いえ、大丈夫ではないんですけど」

「なんでもっと早く言わないんだ。俺の上靴なんて悠長に洗ってる場合じゃないだろう？ とにかく後ろに乗れ」

少し強い口調になってしまったことに、言いながらすでに後悔していた。だが、言い出してしまったことを途中で軌道修正することは出来そうになかった。

「ごめんなさい」

びくりと体を強張らせた有馬を、自転車の後ろに乗せ、俺は駅までの道を走らせた。

「俺のために怒られなくていいんだよ。俺だって上靴の一つくらい一人で洗えるんだぞ。無理して俺に付き合う必要なんてないんだ」

俺の声が聞こえているのかいないのかは分からないが、彼女の手が力強く俺の服を掴んでいた。

もしかしたら、強く言い過ぎて泣かせてしまったのかもしれない。そう思いはしたが、今の状況で後ろを振り返ることは出来そうになかった。

私は無性に嬉しかった。

少し強めの中村君の声と真剣に心配してくれているその少し怒りを含んだ表情。本当は少し怖かった。けれど、私のことを考えてのことだと解っているのです、その怒りさえも嬉しさに代わっていた。

彼の服をギュッとキツく握りしめた。

涙が零れそうだ。

きっと今私が泣き出してしまったら、彼は完全に誤解するだろう。自分の物言いが私の涙を誘ったのだと、優しい彼は後悔するかもしれない。

本当は違うのに。私はそれを上手く説明することもできずに、後悔し続ける彼を見ることしかできないだろう。

だから、私は今、決して泣いてはいけないのだ。

親以外で私を叱ってくれた人は、彼が初めてかもしれない。もちろんそれは、あの時からだ。あの時から私は、あまり叱られなくなった。今までは散々叱られていた怖いクラス担任の教師でさえも私を叱らなくなった。親でさえ、私をあまり叱らない。

今日、門限を過ぎて帰った私に二人は心配そうな表情を浮かべるだけで、決して怒らないだろう。それを承知で、少し遅く帰ってみようと考えていたのかもしれない。

あの時を忘れたいと思っているのは私だけじゃない。だが、私以上に両親はあれを忘れてはくれない。いつも何かに怯えたような表情を浮かべ、私に思い出させるのだ。

自転車は、あっという間に駅へと運んでしまった。

涙が出そうな私は、早く彼と別れたいと思うのだが、それとは相反した部分ではもう少し時をともに過ごしたいと思うのだ。

「有馬君、ごめんなさい。あと、ありがとうございます。それから、また来週」

「ちょっと待ってて。俺、チャリ駐輪場に置いてくるから。心配だから家まで送る。なんなら、俺が遅くなったわけを話すから。ちょっと待ってろな」

断るすきすら与えずに、中村君は自転車に乗って走って行ってしまった。残された私は、待たないわけにはいかなかった。

複雑な気持ちではあったが、もう少しだけ彼といられることが嬉しかった。

駅横の駐輪場に自転車を置いて、走って戻ってきた中村君の額には、うっすらと汗が滲んでいた。

「そんなに急がなくても大丈夫ですよ？」

「大丈夫じゃないだろ？ 早く行こう。有馬んちの駅はどっち方面？」

私が最寄駅の名を告げれば、ちょうどそちら方面行きの電車が到着するところだった。自然に手を取られ、改札の中へと引かれた。

「少し走れるか？」

中村君の表情からは、先ほどの怒りはもう感じない。強引には感じないその手の温もりが私を導いてくれるような錯覚に陥った。電車までへの道ではなく、もっと壮大なもの。大げさに言ってしまう、人生の道筋を。

どこまでも、その背中についていきたいと思った。その許可すら貰ってもいないのに。追いかけることすら許されていないかもしれないのに。そう考えると、その背中がなんだか切ないものに見えてしまった。

中村君の手に引かれ、閉まる間際に電車の中に吸い込まれた。まるで図ったかのようなタイミングで私の背後でドアが閉じられた。

第5話

電車の中は適度に混んでいたが、満員という程でもなかった。

放すタイミングを失った手は、未だ繋がれたままだ。

気まずい空気を払拭するかのように、ぽつりぽつりと中村君が話し掛けてくれていた。私としては、どれだけ無言のままでも気まずさを感じることはなかった。

各駅停車の3つ目の駅は、あつという間についてしまった。

「もう、ここで大丈夫です」

そう言ったのは、私がズルいからだ。

「家までちゃんと送らせて」

中村君がそう言ってくれると、解っていたからだ。私は、彼の優しさに付け込んだのだ。

きっと彼は、家の前まで行ったら、責任を感じて母に挨拶をすると言うだろう。

母はどんな顔をするだろうか。喜ぶだろうか。私にしか解らない程度に眉を潜めるだろうか。

私は、母の反応を見たいのかもしれない。

私なりの反抗なのかもしれない。

「お願いします」

私がそう軽く頭を下げると、中村君は嬉しそうに微笑んだ。

見慣れた街並を中村君と歩くと、歩いたこともないような場所に思えてくるから不思議だ。今まで愛着も何もなかった町が大切な何かに思えてくるのだから。

「中村君は帰りが遅いと怒られませんか？」

「おお。有馬から初めて話し掛けて貰ったな。ハハッ、なんか嬉しいな」

屈託のない彼の笑顔は、私を癒しもし心を乱しもある。

私はどう反応すべきか解らずに、曖昧な表情をしていたに違いな

い。

「俺んちは全然煩くない。俺、男だしね」

「そうですね。男の子に、門限はないですよ」

馬鹿な質問をしたと、恥ずかしくなった。

「女の子にもそんな厳しい門限はないんじゃないか？ 両親に愛されてるんだな」

確かに愛されているのは事実だろうが、門限とそれとはあまり関係ないことだろうと思う。

それは、やはり両親がナイーブになっているためだろう。

恐らく、私なんかよりもずっと気にしているのだ。責任すら感じているのかもしれない。感じずにもいい責任などを、今も感じているのだ。

「そうなんでしょうか……」

曖昧な言葉を零した。

何かを察してくれたのか、中村君はそれ以上その話題に触れてはこなかった。

駅から私の家までは、大した距離ではない。だが、その距離の中で色々な話を中村君はしてくれた。舞い上がっているのか、何を話しているのかは、話が変わるそばから忘れてしまっていた。

それでも、その時間がとても楽しいと思ったのは事実だった。

やがて見えてきた家の玄関の前には、母が立っているのが見えた。右へ左へとそわそわと方向を変えながら、手を揉んでいた。

ああ、心配をかけてしまったんだ。

その姿を見れば一目瞭然だった。

思わず立ち止まってしまった私に、中村君の視線が降りかかる。

中村君の視線が私の視線を辿り、母へと向けられた。

「もしかしてあれお母さん？」

私が頷いたのと、母がこちらに気付いたのは同時だった。

母は、私を見た後、私の隣にいる中村君を見、驚き、そして次の瞬間睨みつけた。

有馬の母親と目が合って、慌てて頭を下げた。

たっぷりとお辞儀をし、俺が頭を上げた時見たのは、物凄い形相でこちらに走り寄る母親の姿だった。

「今すぐ娘から離れなさいっ。警察を呼ぶわよっ」

驚きのあまり俺は何もできず、ただ母親の姿を見下ろすことしかできなかった。

「お母さんっ。違います。中村君はっ、遅くなってしまった私を心配してここまで送ってくれただけですっ」

俺の胸元を掴んで持ち上げていた母親は、珍しい有馬の怒声に驚き、顔だけを有馬に向けた。

「え？」

「だから、帰りが遅くなってしまった私のために、わざわざ家まで送ってくれたんです。中村君はクラスメイトです。危険な人じゃありません。お母さん、失礼ですから早く手を放してください」

「え、ああ、ごめんなさいっ」

怒気が抜けたように母親の手があっさりと放れた。

「いえ、有馬が遅くなってしまったのは俺のせいなんです。すみません。俺がだらしないせいでいつも有馬を煩わせてばかりで……。だから、有馬を叱らないで上げてください。俺が叱られますから」

言葉を濁した。

さすがに上靴を洗ってもらっていて遅くなったとは、有馬の母親の心証を悪くするようなことは言いたくなかった。

「いいのよ。門限に遅れたって言ってもほんの数分なんだから。ただ、心配になってしまっ。ごめんなさい。変な誤解をしてしまっ。て」

「いえ、こちらこそすみませんでした。じゃあ、俺はそろそろ帰ります。またな、有馬」

ぺこりと母親に頭を下げ、申し訳なさそうな有馬に対しては笑顔
を向けた。

「待ってください。お礼にお茶を入れますので、少しだけ上がって
いってください」

踵を返して歩き始めた俺の腕をとってそういったのは、有馬だっ
た。

意外な誘いに驚きと嬉しさが込み上げてきた。

嬉しくて飛び上がって喜びたいような誘いではあったが、それを
受けることは残念ながらできない。

「もし良かったらどうぞ」

有馬の母親もぜひにと、にこやかに誘ってくれるが、俺はそれを
失礼にならないように断らなければならない。

「ありがとうございます。そうできればいいんですが、弟が家で待
っていますので」

「弟さんが？ 一人で？」

「はい。両親が共働きなので」

「ご両親は早く帰ってくるのかしら？」

「いえ、いつも9時過ぎないと帰ってきません」

同情を含んだ眼差しを向けられたが、俺はもうその日常に慣れて
しまって、何の感情もわからない。それが普通だと思っているからだ。
弟はまだ小学生なので、多少思うところはあるのかもしれないが。

「お夕飯はいつもどうしてるの？」

「それは、俺が作ってます」

だらしない俺ではあるが、料理だけは出来た。

ただ単に必要なに迫られてやらなければならないかったのだ。育ちざ
かりの弟が両親が帰ってくるまで夕飯を待てるわけもなく、そうな
れば俺しか作れる奴がいらないんだから作るしかない。

両親も俺が作ると大分楽になるのだろう。必要以上に喜ばれるの
で、止めるに止められなくなってしまったのだ。

「そうなの。偉いのね。そうだわ。もううちのお夕飯は拵えてある

の。良かったら今日のおかずの一品にして。ね？」

そういうとバタバタと走って行ってしまった。俺が止める隙も与えてくれなかった。

第6話

「あの、すみません。本当は早く帰らなければならなかったのに、私のせいでこんな所まで来てもらって」

申し訳なさそうに俺を窺う有馬に、問題ないという風に微笑んでみせた。

「そこまで早く帰らなくても大丈夫なんだ。まだ6時だし。それにしても、俺、図々しく貰っちゃっていいのかな？」

「勿論です。母が料理を詰めている間上がって下さい」

有馬に腕をとられ、家の中に招き入れられた。こんな風に腕に彼女の手の熱を感じるのは二度目だ。手の平とはまた違う。どう違うかは、説明しづらいのだが。

「お邪魔します」

「どうぞ、上がって。今詰めちゃうからね」

奥から大きな声が返ってくる。

有馬の母親は、随分明るいタイプのようなのだ。

今の姿が本来のものだとするなら、先ほどのあの様子からして、有馬のことを相当心配していたのが窺える。

僅かに狂気的なものすら感じたのだから。

有馬の家は、綺麗できちんとしていた。彼女も母親も元々きちんとした性格なのだろう。

普段、雑然とした家に住んでいる俺としては、少しばかり落ち着かない。

「うちの子は学校ではどうかしら？」

「真面目で、面倒見がよくて、クラスメイトから好かれています」

有馬はそれはもう飛び出すんじゃないかと心配になるほど目を剥いていたが、これは事実なのだ。本人は、周りを理解していないので、寝耳に水とでも思っているだろうが。

「まあ、そうなの？」

「はい。ただ、有馬には積極性があまりないので、仲良くなりたいたいと思っているクラスメイトは遠目に見てしまっているように思います。有馬さえもう少し話し掛ければ、すぐにでも沢山の友達が出来ますよ。クラスメイトたちは、みなそう望んでいますから」

「そんなことはありません」

何故か涙目で否定する彼女を見て、何かいけないことを言ってしまったかと口をつぐんだ。

「有馬？」

いくら考えても、俺の言葉のどこに泣かなければならない要素があるのか分からなかった。

「すみません。着替えてきます」

顔を隠すように額に手を当て、足早に去っていった。

「俺、何か言っではいけないことを言ってしまったでしょうか？」

「違うのよ。あなたが悪いんじゃないの。気にしないで」

有馬母は、それだけ言うかと再びおかずをタッパに詰め始めた。

きっと俺は触れてはならない何かに触れてしまったのだろう。申し訳なく思ったが、謝罪を口にすることは憚れた。

「中村君は、もしかして那津子の彼氏？」

たった今までの雰囲気などまるでなかったような浮かれた様子に戸惑いつつも、その雰囲気吞まれることにした。

「いえ、違いますよ」

そうなればいいとは思っていますが、という言葉を読み込んだ。

「そうなの？ 残念ね」

有馬母の落胆ぶりはあまりに激しく、がっくりと床に頭を付けるんじゃないかと思えるほどだった。

「すみません」

その姿につい、謝ってしまった。

「いいの。でも、中村君は那津子のことどう思う？」

さすがにそれをこの場で答えるのは、避けたい。有馬が今にでも

階下に降りて来そうなんだ。

「お母さんっ。なんてことを聞いているんですか」

私の声に振り返った中村君が私を見て、安堵した顔を浮かべた。
そりゃ、困っただろう。

私のような地味な人間を中村君が選ぶわけがないのだ。今でこそ、そこそ会話もするようになったが、私を選ばなくても中村君には寄ってくる可愛い女の子はたくさんいるのだ。

普段から中村君の机の周りには、人がよく集まる。女の子も男の子もみんな中村君が大好きなのだ。

だらしなくて、少々面倒くさがりなところがある彼だけれど、周りの友達のことをよく考えているし、相談ごとなんかも乗っているのを見かける。人望があるのだ。

屈託なく誰とでも話す中村君を羨ましいと思う反面、いやな気持ちも浮かび上がってくる。八方美人とも取れる中村君は、数多くの女の子から好意を抱かれている。それに全く気付いていないのだ。女の子たちは自分だけに優しいと錯覚して、恋に落ちる。そして、冷静に考えることができなくなるのだ。

私もまたその中の一人なのかもしれない。

ただ、一度きり家まで送ってくれただけなのに、中村君が私のことを好きなのかもしれないなどと、自惚れてはいけないのだ。

「別にいいじゃないの。お母さん知りたいんだもん」

カワイ子ぶったところで所詮母はもうおばさんなのだ。可愛さに欠ける。それでも、中村君が優しく微笑んだりするから、母も図に乗るのだ。

中村君に特別な女の子ができれば、その女の子はきっと苦労する

だろう。それとも、特別な女の子ができればほかの女の子への優しさは出さなくなるのだろうか。

「可愛くないです。止めてください」

「ハハッ。有馬は結構お母さんには手厳しいんだな？ 反抗期なのか？」

「違いますっ。お母さんが変なことを言うからです」

必死にそういう私を見て、中村君はケタケタケラ笑い始めた。「どうして笑うんですか？」

「ごめんっ。でも、なんか面白くってさ。学校とは違う有馬が見れた気がして嬉しいよ」

軽快な笑い声を漏らしながら、私が舞い上がってしまいそうな言葉の事もなげに言ってる。

ほんのりと頬を染めてしまっているであろう私を、意味ありげに母が横目で窺っている。舞い上がっているのは私だけではないようだ。中村君が帰ったあとに、根掘り葉掘り聞かれることになるのだろうか。

「さあ、中村君。出来たわよ」

今日は何のご馳走だ、とツツコミたくなるほど多いそのタッパの数に、中村君も驚いていた。

「こんなにいいんですか？」

「ええ、もちろん。今日は少し作りすぎちゃったから実は中村君が来てくれて助かったのよ。うちは女の子二人で男はお父さんだけだから。お父さんもそんなに食べる方じゃないから、作り甲斐がないのよね」

「そうなんですか。じゃあ、遠慮なくいただきます」

それはもう本当に嬉しそうにタッパを見下ろす中村君は、なんだか可愛らしかった。今日は疲れて料理をするのも億劫だったのかもしない。

第7話

まるで二人だけの特別な秘密が出来たかのように、私と中村君の間には何か目に見えないものが出来たように思う。

それはただ私の希望的観測かもしれない。そうでないかもしれない。

どちらにしろ二人の関係は他人には見分けることが出来ない程度には親しくなったように思える。

「なあ、有馬。この解き方教えてくれ」

隣の席の特権だろうか。こんな風に中村君に勉強を教えたり、試験前にノートをコピーしてあげたり、そんな些細なことに舞い上がっていた。

自習の時間、試験も近いこともあって、あちこちで自主学習をしている姿が見受けられる。もちろんただひたすらお喋りに夢中になっている者も多くいた。

「ねえ、有馬さん。私にも勉強教えてくれる？」

中村君に数学を教えている最中に声をかけられ、私と中村君は同時に顔を上げた。

「はい、大丈夫ですが、少しだけお待ちください」

そのクラスメイトは、私の記憶が確かならば、元々勉強の出来る人で、他人に質問せずとも自力で十分出来るはずだ。教える請うよりも、教える方が多いはず。というより、教えるを請う姿など見たことがない。

「と、なります。いかがですか。解りました？」

「ああ、分かった。ありがとな」

私の前の席に座り――前の席の人はどこへ行ったんでしよう――、ちらちらとこちらを窺っている視線をたえず感じていた。

なるほど、総合的に考えて、彼女は中村君に好意を持っていると考えてよいのだろう。

「あの、山内さん。どこが解らないのでしょうか？」

「ああ、ここなの」

私が説明を初めても、彼女は説明を聞く姿勢にはなかった。

ノートに数式を書きながら説明しているわけだが、彼女の視線が私の手元を追うことはなかった。おそらく私が説明をスッ飛ばしても、彼女は気付きもしないのだろう。

「と、なります。解りましたか？」

数式を最後までさらりと書き、そう告げれば、彼女は驚いたように顔を上げた。そんな早くに説明が終わるわけではないと思っているのだろう。

「解りませんでしたか？ もう一度説明しましょうか？」

彼女が困惑した表情を浮かべている。少しいたずらが過ぎただろうか。

「おい、山内。終わったんだったら早く退けよ。そもそもお前聞かなくても自力でなんとかできるだろう？ 俺は今回やばいんだよ。譲れよ。しかも、お前の目的は有馬じゃねえだろ？ 見え見えなんだよ」

驚く勢いでまくし立てたのは、中村君とは反対側の席に座る石原君だった。

「石原君、そんなに怒らないでください。どこが解らないんですか？ 教えますから」

「ここだ」

石原君は山内さんを睨み付けたまま教科書のある一点を指し示した。

山内さんは、石原君の怒気に恐れをなしたのか、そそくさとその場を後にした。

申し訳なくも思ったが、石原君が威圧的な視線を向けてくるので、仕方なく問題の解説を開始した。

「と、なります。解りましたか？」

「分かった」

「石原君。あまりあんな言い方をするのはおすすめ出来ません。女の子にはもう少し優しくしてあげてください」

「なんでだよ。別にいいだろ。俺の勝手だ」

不貞腐れたような顔に、私は苦笑が漏れた。

彼はいつまでもあまり変わらない。それが私を安心させてくれる。

有馬と石原が親しげに話しているのを見て、正直ささくれだった気持ちになってくる。

それがただの嫉妬であることは、充分理解している。

「なあ、有馬。いつんなったらその地味な格好止めるんだよ？」

「止めるもなにもこれが私です」

石原は声が大きいのので、会話は筒抜けだ。

有馬と石原が同じ中学校の出身だというのは、石原本人から聞いたことがある。

「そんな見え透いた嘘俺に通じるわけないだろ？　俺を誰だと思ってるんだ」

「石原君です」

「そうだ。俺は石原だ。だが、ただの石原じゃない。お前とは幼稚園のころから一緒だったし、小学校だって中学校だって高校だって、何の因果か同じクラスだ。お前とは腐れ縁の石原だ。その俺がお前の異変にこれまで目をつぶっていたのは、いつかお前もそんなくならないことに自分で気付くはずだと思ったからだ。一体いつまでお前は自分を偽り続けるつもりだ」

この話の内容は、他人が聞いていい類の会話ではないはずだ。それをまるでクラス中に聞かせるように声を張り上げる石原に、俺は腹が立った。

「石原。もうその辺で止めておけよ。有馬が困ってるし、こんなところで話じゃないだろ？」

「うるさい。止めるな。こいつには、目を覚まさせる必要があるんだっ。こんな地味な格好して、視力なんて悪くもないのにメガネなんかかけて、いつも丁寧なしゃべり方しやがって。あの事件さえなきゃ、お前は今でもあの時のままの有馬だったはずだ。みんなが大好きだった有馬だったはずだっ」

俺がいなしたことが、石原をさらに興奮させてしまったのかもしれない。

隣の席で、有馬が頭と耳を抱えて、石原の声を遮断しようと努めていた。

石原の語っていることは全て、有馬の地雷だ。それを知っていて石原はそれを爆発させようとしているのだ。

「俺がああ男を殺したらお前は元に戻んのか？」

石原の叫び声に、有馬の甲高い悲鳴が被さった。

「石原、いい加減にしろっ。委員長、有馬は保健室に連れて行く」
いつの間にか静まり返っていた教室で、俺の声だけが静かに響き渡っていた。じきに騒がしさに耐えかねた教師が教室の様子を見に来るかもしれない。そうなる前に有馬をこの教室から解放するべきだ。

泣き続ける有馬を抱き抱えるように、教室を後にした。

誰の声もなく、視線だけが俺たちを見送っていた。その中に、当然その発端となった石原もいるのだ。石原に対する怒りを鎮めるのは容易ではない。だが、そんなことをするのは今ではない。有馬のことが先だ。

有馬が抱えている何かは、俺が想像しているよりも遥かに大きなもののかもしれない。

俺が彼女の力になりたい。彼女は力にならせてくれるだろうか。泣き崩れる彼女の肩はあまりにも細く、今にも崩れてしまいそうなほど心許なかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6353z/>

もう何も怖くない

2012年1月12日11時46分発行